

いまの姿と将来の姿のイメージ ②

平成 25 年 12 月 理事長 片山喜章

みなさんはどのように考えますか？ この時期の子どもどうしのケンカや乱暴な振る舞いは、将来、非行やイジメにつながるものでしょうか。家庭や保育園で、どのような接し方が望まれるのでしょうか。保護者の方にとっては大きな心配の種だと思います。保育園としても“基本的な保育の形”と職員集団の“子ども観”が問われていると、日々考えています。

いま、園生活のなかでは、乱暴な振る舞いやトラブルが、時折、みられます。けれども、過去の「園だより」を繰ってみると、10年前も、全く同じ問題を切々と綴っていました。

そしてその後、学校へ行った彼らの大半は、穏やかになっていて、同園会ではおおらかに育っている姿を見せてくれます。私自身の幼少学童期は、ドギツイ巻き舌で罵りあったり、殴り合いのケンカは茶飯事で、石を投げたり投げられたり・・・病院で縫合治療を受けたことも数回ありました。それでもみんな仲良しでした。ただ、今と違うのは、当事者の親も地域社会もマスコミも、さほど問題視せず、問題が生活の中に沈殿していたということです。

私は、乳幼児期は、適度に悪態をついたりつかれたりする経験で“抵抗力”が育まれると考えます。一方、現代は、社会全体がデリケートになって、親も子も先生も傷つきやすくなり、乱暴な言動は許し難いと感じる価値観が広がり、保育現場も葛藤する現状があります。

トラブルを起こした子どもに対して、大人（親や保育者）は見逃さない事。これが第一だと考えます。見逃さないとは、単に叱責することではなくて、乱暴に振る舞った子の気持ちを、その場で汲み取って共感する事。そして、愛情表現として厳しく叱る必要があります。そこが、とても大事で、むずかしい実践です。親や保育者が焦りやイラダチを胸に抱きながら、理詰めで、子どもを叱り、諭しても、逆効果になるケースが多く、大人の価値観や振る舞い方、つまり“自分たち自身のありよう”が問われている、と言ってもよいと思います。

保育園では、何より、子どものしたい事＝探求心を満たす事を大きな目標にする。これがトラブル防止策の第一義です。さらに大人と子どもが指示命令ではなくて“対話する関係”であること。そして、子どもどうしが“対話と協働の関係性”を築けるように導くこと。

そのうえで、乱暴な行為があったとき、即座に端的に諭して愛情表現をする。ここに私たちの課題があります。他の子どもたちも、その様子を眺めることで自然に学習します。それが“規範のある園風土”を築き、その風土が堅固になれば子どもたちの自制心も育ちます。

いま、異年齢保育が中心になっています。そこでは面倒をみたりみられたり。それは自然な形のストレスと同時に解放感でもあります。それによって“やさしさ”が生まれています。

12月。発表会のイメージづくりのための保育も始動します。この2種類の保育の差異から生じる風が“規範のある園風土”を運んでくれたなら、そんな事を願う1年の最終月です。